ACL/ISCMの夕べV

アジア作曲家連盟／国際現代音楽協会の夕べ

――台湾・ルーマニア・日本――

11月25日(水)26日(木)午後7時
すみだトリフォニーホール(小)

JFC第2回レクチャー

―すぎやまこういちと現代音楽を楽しもう―

11月26日(木)午後4時～6時
すみだトリフォニーホール(小)ホワイエ

聴き応えのある鍾耀光の作品

佐野光司（音楽評論家）

第五回「アジア作曲家連盟／国際現代音楽協会の夕べ」（横文字だらけのタイトルは、この略号）が11月25、26日の二日間に渡って「すみだトリフォニーホール」の小ホールで開かれた。今回は台湾、ルーマニア、日本という副題が付いており、初日が台湾と日本、二日目がルーマニアと日本の現代作品が演奏された。これはその初日の報告である。

25日は台湾から鄭　玉雲(72～)、鍾　耀光（56～）の二作品、日本から川島素晴(72～)、堰合　聡(71～)、久保　禎(62～)の三作品が演奏された。鍾　耀光を除けばいずれも若い作曲家であり、その音楽も、良い意味でも悪い意味でも「若さ」が感じられた。

川島素晴の発声者と打楽器のための、〈二つのインヴェンション〉（95）は、単なる声楽作品ではなく第一曲が〈音節→単音〉と「音高→旋律」の連関〉第二曲が〈音色と表意の可能性〉という題名が付いているように、この作品は人声の発音の様々な可能性を試みた作品である。川島の取り組んだ課題は困難な問題であり、それに向かった意欲は買いたい。そして作品はそれなりの成果は収めていると思う。

しかしこうした問題は第二次大戦後に多く試みられてきたものであり、古くはベリオの〈サークルズ〉や〈ヴィザージュ〉、また日本では湯浅譲一の〈ヴォイセス・カミング〉や林光の〈恨歎里〉がある。つまり人声と発音の問題は、それだけであればそれぞれアプローチが異なっているとはいえ、かなり試みられているものなのだ。

川島の作品が、そうしたものにさらに何かを新たに加えているか、という点で聴くと、音楽の変化の過程にもの足らなさが残る。

堰合　聡の〈クァルテット三＋一〉（95）を聴くと、彼が作品を構成する手法を心得ていることが分かる。また音楽の過程で一イヴェントごとに置かれる沈黙は、それなりの効果を聴き手に与える。しかし音の組み立てにのみ集中して、音から作曲者の情趣が伝わってこない。つまり響きに作曲者の感性の輝きが映されていないのだ。また音響パレットがいま一つ乏しいのは若さゆえの（川島もそうだが）やむを得ないことか。

鄭　玉雲の〈五重奏〉（97）は、音楽の焦点がどこにあるのか分からない。作品のスタイルも新古典主義的なものにやや手を加えたあたりのもので、ここで他の作品と比較するのは気の毒な気がする。短い四つの楽章からなっており、第三曲にこの作曲家の音色彩と音事象の関係に、微妙な繊細さが感じられる。まだまだこれからの人であろう。

久保　禎の、クラルネットと打楽器の〈往還歌〉（96）はなかなか聴き応えのある作品である。特にクラリネットの響きに作曲者の声が聞こえてくるかのように、単音の中に豊かな表情がある。またクラリネットと打楽器の関係が巧みである。その関係は作曲者が意図しているように、確かに日本的な「間」の関係にあり、その呼吸がこの作品を生きたものとしている。

残念なのはクライマクスに現れる打楽器のリズムだ。それまでの過程が、緊張に満ちた音と沈黙の過程であったのに対し、ここで突然、和太鼓的なリズムとなってしまう。クライマクスはほとんど打楽器の乱舞にだけ委ねている。前半の緊張力と、後半のクライマクスとそれに向かう過程との、両者の様式的な不統一が、それまでのこの作曲者の声をかき消してしまったかのようだ。

鍾　耀光の弦楽四重奏曲〈驚濤裂岸・捲起千堆雪（逆巻く波に降る雪）〉（97オリジナルは別の室内楽）は、当夜最も聴き応えのある作品であった。彼は一九八〇年から六年間、香港フィルハーモニーの打楽器主席奏者を勤めており、それまで作曲は独学であったという。その後アメリカで作曲を本格的に学んだという変わった経歴の持ち主だ。

この作品は弦楽四重奏という音色的には同一の媒体から、実に豊かな音響を引き出すことに成功している。音色作法を主体とする今日、弦楽四重奏曲はかなり制限されたジャンルである。だが鍾　耀光のこの作品は、そうしたハンディを感じさせない出来だ。弦楽四重奏による音響の作りにリゲティに似た響きがあるに

演奏会後のパーティーで。
左より松下副会長、遠藤理事、佐野光司氏